

隨
筆

森鷗外と藤沢

井 口 鐵 介

古い本箱に岩波版の『鷗外全集』全三十八巻が並んでいる。第三十五巻が日記の部で、その中に「自記材料」があり、明治四十年五月二十日の記事は左のようである。

二十日、午前六時三十五分新橋を發し、藤沢に往く。検査所は大阪町にあり。

鷗外はなぜ藤沢を訪れたのか。それは一週間前の記事を読めば判明する。

十三日、午前五時十五分上野を發し、足利に往く。徴兵の事を視るなり。帰途足利学校と鏝阿寺ぼんあでらを訪ふ。

鷗外はその後も忍しの・熊谷・石岡・大原・松本などに出張している。

大阪町は、藤沢宿の大久保町と坂戸町が合併した町で、現在の藤沢公民館のあたりに町役場があった。そこで徴兵検査が行われたのであろう。

鷗外は陸軍軍医として視察のために藤沢を訪れたのである。帰途に近くの遊行寺を訪ねたか否かは不明であるが、後年遊行寺と藤沢宿が関係する三つの作品が書かれた。以下簡略にそれらについて記しておく。

「寿阿弥じゅあみの手紙」 浅草の日輪寺のこと、文政十一年の遊行上人廻国のことが書かれている。日輪寺は時宗ときむね・総本山遊行寺の触頭ふせがしらを勤める寺である。

「細木香以ほそきかみ」 遊行寺の阿弥号について詳しく述べられている。幕末期の通人香以が遊行寺の阿弥号を尊重し、取り巻きたちに阿弥号を与えた。香以は鎌倉や江の島を遊覧した際、遊行寺に登山し藤沢上人に拝謁がいせつしている。

「伊沢蘭軒いざわらんけん」 蘭軒の友人菅茶山が江戸から故郷の福山へ帰る途中、藤沢宿の旅館に宿泊したことが記されている。文化十二年二月のことである。

廿八日。放晴。鎌倉の遊を遂ぐるを得たり。七里が浜を経て、絵の島に至り、藤沢駅に宿す。

この旅については茶山の旅日記「東征暦」や同行の河崎敬軒が著した『驥嶽日記』があり、旅の様子が詳しく記されている。茶山たちは藤沢宿のたばこ

屋という旅館に泊まり、甚だ冷遇されたことも描かれている。

『鷗外全集』第三十六巻は書簡の部で、ここに鶴沼の地名が出てくる。明治四十四年八月、鷗外が後輩の軍医である橋本監次郎に岳父の診察を依頼した書簡である。

拜啓先日一寸御話申し上げ候小生岳父、明八日御診察下されたく願ひ上げ候、陸軍省の方は御届けに及ばず、小生明日出省、然るべく取り計らい申すべく候、患者は神奈川県藤沢町鶴沼村字下鰯^{きもとがし}荒木別荘にて 荒木博臣
汽車は藤沢駅下車、それより三十町程、人力車に御座候、

八月七日団子坂森林太郎 橋本監次郎様

荒木博臣は鷗外の妻志げ子の父で、鶴沼村に別荘があった。字下鰯は現在の鶴沼海岸三丁目あたりである。鷗外が鶴沼村に立ち寄ったことがあったか否か。それは不明である。

根っここの思い

石井明子

春がきて
いつものように
梅の花が咲き
水仙の花が咲き
そして 今年も
いつものように
過ぎてゆくのでしょうか

これをふとした時に書き残していつてしまった夫の心を誰がしるのだろうか。

今、夏の終りをむかえ、我家の庭一面、朝顔の花が咲きみだれ、一勢に天に向って喜びを伝えているみたいだ。朝顔は几帳面で前日から花の形を整え、白い花弁もすつと伸ばし先っぽをちよつとねじり、美しい赤紫色に内側を染め、朝日がのぼるのを静か

に待ちかまえている。そして陽が昇り始めると徐々に花びらを開き、陽の中に勢一杯丸い花びらをピンと広げ喜びを表わし、陽が三時間程になると静かにしほみ始める。しかし毎日次から次へと新しい花が咲き、いつ終わるのだろうと思う位咲き続ける。そしてそれぞれの花に種が四つ程、袋状の中に蓄えられその命を継ごうという意思をみせ命を終る。それらの種は全て地に落ちても根をはるのはほんの少しであろう。

でもその根をはった一つの種からは、次の年に沢山の花を咲かせ続ける——見事な花の命だ。その花の命はどこに在るのだろう種だろうか、いや根だろうか。

神は全ての生物に種と根を与え、それはつながっている。人間も全く同じだろうと思う。

夫と妻は一つの根を共有し、そこから、子や、親や兄弟、友人、社会と枝を広げて一本の木になってゆく。私にも障害を与えられた子を含め三人の子がこの根から伸びた幹に、又それ／＼の枝をはって伸びている。天は、時間を与えて、全ての生物の根から枝をはり生きる様をみているのだろうか。

私の夫は時の止まった世界に居るのかしら。でも私と夫の共通した根がある限り、時間のある、ない世界は別であろうが共に枝をはって共に伸びている。全ての生物と共に。

春がきて
いつものように
梅の花が咲き
水仙の花が咲き
そして 今年も
いつものように
過ぎてゆくのでしょうか

漏水の顛末

市川光治

(文芸光風)

洗面所の壁の中から音が聞こえる。シャーというような音である。

耳を澄まさなければ聞こえない小さな音である。念のため、水道のメーターを見てみると、小さな円盤がぐるぐる回っている。すべての水栓は閉めてある。これは、給水管に漏水があるのではないか。イエローページの補修会社に電話してみると、漏水であるという。電話したのは、午後二時頃であった。三時ぐらいには、点検に来られるという。しばらくすると、補修会社から連絡があり、車の渋滞のため、三時半ぐらいの到着になるという。

ようやく三時半に到着したのは、三五歳ぐらいの小太りの男であった。家の内外を三十分ほど点検した結果、給湯管から漏水していることが分かった、と男は言った。

私の家は八年ほど前にオール電化としたのだが、夜間の安い電気料金の時、湯を沸かしタンクに貯蔵するシステムとなっている。湯はそのタンクから浴室、洗面所、台所に供給されている。湯の温度は八〇℃なのだという。ガス給湯であれば四十五℃ぐらいなのだから、かなり高温である。そのため給湯管が劣化しやすいという。

結論は老朽化した給湯管をすべてやり替える必要

弦の繋がり

梅澤輝也

先日、友からハガキが届いた。『老妻は歩行困難で養老ホーム、自分も最近杖をつけて歩く日々、近々、老妻と共に養老ホームで過ごすことに決めた。ついでにはウクレレを引き取ってくれないか』と。そのウクレレは、彼と一緒にお茶の水の楽器店を巡り、音が気に入って求めたものだ。そしてゆっくりと、ここまでの彼との出来事が、私の脳裏に浮んできた。

彼との出会いは七十一年前、選択した第2外国語が同じで一緒のクラスになった。机の席も近かったので、互いにウマが合うのを何となく感じるようになっていった。大学後期では選択したゼミが異なり、卒業後の就職先の勤務地も異なったので、接する機会は減っていった。それでも折を見て空白を埋めてきた。彼が大阪に出張で来たときはキタヤミナミを巡ったり、私が香港で合弁事業の立ち上げに苦

がある、というものだった。

工事日は最速で三日後、になるという。それまでは、漏水したままになるので、できるだけ水栓を止めたほうが良いという。それから、三日後までは、必要な時以外は、水栓を止めることにした。夜はずっと止めることにした。これで一番困ったのはトイレであった。バケツで水を流せばよいと、小太りの男は言っていた。そうするしかなかった。

水がいつでも出ることの有難さをしみじみ味わった。

やっと三日後に工事に来てくれた時は、心底ほっとした。

復旧工事は半日ほどで完了した。

以前給水管からの漏水があったときは、水道料金が倍ぐらいになって、驚いたのだが今回は発見が早かったせいも、水道料金はほとんどいつもと変わらなかった。

闘っていた時は、彼は出張の度に必ず立ち寄ってくれた。

退職後、私はフランス語をもう一度学びたいとリヨンに語学研修を思い立ち、そのことを彼に告げると「俺もゆく！」と、再び机を並べて学ぶことになった。彼の奥方からは「あなたがたの様なおじさんを受け入れてくれるホームステイは無いわよ」と云われたが、私たちはそれぞれ素敵なホームステイ先に恵まれ、ミニ留学生生活を楽しんだ。週末は二人であるちこちと小旅行、とりわけ記憶に鮮明に残っているのは、モンブランの旅である。

ホームステイ先のマダムは、観光客の多いシャモニーを外し、少し離れた小さなホテルをとってくれた。列車でリヨンを出発、途中で登山電車に乗換え、アルジェンテールに到着。翌日、シャモニー（1035米）から70人乗りのロープウェイで一気に3777米のエギュ・ドゥ・ミディ山頂へ、展望台からアルプス最高峰モンブラン（4810メートル）を眼前に仰ぎ見た。これまでに感じたことの無い感動と興奮を彼と共に味わい、夢中でカメラのシャッターを押しまくった。さらに、そこから小型

ロープウェイでイタリア国境地点にあるエルブローネールへ、視界に拡がる、峻嶒だが美しいアルプスのパノラマに息をのみ、白銀の異界に漂う心地に身をゆだねた。

彼から葉書を貰って十日ほど経って、クロネコ便でウクレレが届いた。私はすぐにケースを開けて弾いてみた。深く響く弦の振動に誘われて、彼との縁の情景が浮かんできた。

私は、なんでも彼に電話した。だが、自宅にも、携帯にも繋がらない。メールも届かない。どうしたのだろうか？ もはや浮世を逃れて隠遁の生活に入ってしまったのかと、消息を案じる日々……。

辛うじて繋がっているのは手元のウクレレの四本の弦しかない。

戦争を終らせて

大和田 三代子
(はまゆう)

今年も、広島・長崎の原爆の日を迎え、多くの人が、犠牲者たちに手を合せ、敬けんな祈りを捧げた。何の罪もない子どもたちや先の短い老人たちが、原爆の犠牲になった。

私たち家族は、父の軍属の異動で、昭和十八年十二月に千葉県の銚子へ、十九年の十二月に広島へ、二十年の七月末に新潟県へと異動になった。新潟県に着くか、着かないかの内に、広島、次いで長崎に原爆が落とされた。私はまだ小学生で、よく分からなかったが、八月十五日、父と母が二人並んで窓の方を向いて、直立不動で涙を流して、天皇陛下のお話を聞いていた姿を今でもはっきり覚えている。戦争に負けたんだと、後から聞いた。

しかし、毎年原爆の記念の日を迎えて、多くの犠

牲者の人々を思うと、今の平和な暮らしのありがたさと共にその人々の悲しみのあることを忘れてはならないと思っている。

現在も世界のあちらこちらで戦争は止むことなく続き、罪のない子どもたちが犠牲になっている姿をテレビで見るとたまらない。世界の国々が協力し合って、科学を、この地球上の生き物や人々の幸せのために使っていたただくことは出来ないだろうかと願う。

戦争で犠牲になった人々、私たちだって何時その立場になるか、わからないことを思うと恐ろしい。改めて今まで犠牲になった皆さんへ強く深い祈りをささげたい。

幸せな明日のあることを祈りつつ。

令和六年八月

蛤

桐山 さとみ

夏のある日、片瀬の砂浜。藤色の空は晴れ、サーファーが沖に浮かぶ浜辺は平日の早い時間とあってか全体にのんびりとしていた。

波打ち際を一人歩いていたら私は、足元に二枚貝を見つけた。象牙色と薄茶の縞模様、大きさは拾い上げた手のひらほどの立派な蛤だ。

持ち帰り、バター醤油でいただきたいところだったが私は善良な一般市民である。元に戻して去ったのに、しばらく後に道を引き返して再び出会った。今度の彼だか彼女だかは、殻の外に白い足を出してひらひらさせていた。

半ば海水に浸かった砂の上で、日向ぼっこのつもりだろうか呑気なものだ。自分の美味しくも傷付きやすい部分を、私のようなニンゲンに晒して平気にしている。他の小さな貝たちは、被っていた砂を波

にさらわれただけで慌てて潜っていくのに。

貫禄、という言葉が脳裏に浮かぶ。ここまで成長するまでには危機的瞬間も多くあったはずだ。幾度死線を潜り抜けたら、こんなふうには「生きるも是、死ぬもまた是」の佇まいを身につけられるのだろうか・・・などと考えてしまうほど、あまりに蛤は堂々としていた。

いいな。胸の中だけで呟いた。正直、微かな羨望をこの軟体動物に覚えた。尊敬の念すら抱いたかもしれない。

私も、ほんの少しでも。頑なな精神の殻を自ら抉じ開け、弱く柔らかな部分を日光の下に差し出すことができたなら、と。

恐れを核に、幾重にも不安を巻き付けて育つ黒真珠と共にこれまで生きてきたように思う。歪な異物に胃の底が痛んでも、吐き出すこともできず抱え続けていく厄介な自分の一部。その正体は何かと突き詰めていけば結局のところ、生きていく不安と死への恐怖に集約するような気がしている。

けれども、そろそろ疲れてきた。ずっと怖がりながら私は生きてきたし、たぶんこれからもうそんな

のだ。きつと臨終の際にも嫌だ嫌だとぼやきながら旅立つのだろう。

だから、もう諦めたい。

その辺に大の字に寝転がり、さあ如何様にでもと運命を受け入れる諦観を持ちたい。

美しい朝の浜辺でゆったりと、海水に足を浸して夢が見られるように。

波音が近く聞こえて、泡立つさざなみがくるぶしを洗った。これまでで一番遠くまで海岸線が伸びる。白い波が浜砂と共に蛤を巻き込んで、見えなくして、そうして退いていった後には何も残さなかった。

さよならと、口の中だけで別れを告げた。貝の寿命とはどれほどなのか私は知らない。けれど、なるべく健やかにあるようにと祈りながら立ち上がった。

目線を上げた先には空との境目が淡く溶けた水平線があって、その下の海には今日も無数のいのちが揺蕩っている。

せりちゃんカルタ

久保田 文子

(はまゆう)

「わたしはね、しょうらいアイドルになりますよ」
孫のせりちゃんと「せりちゃんカルタ」を作った。
せりちゃんは五歳。ママはお仕事、お姉ちゃんは中三で受験勉強に余念なく、パパと二人で遊びに来たのだ。

「せりちゃんカルタを作ろうー」という私の提案に、せりちゃんもパパもすっかり乗り気。パパは早速コピー用紙を八等分に切り、取り札と読み札を作成。

私が「あ」と書いて、
「あさがきた。きょうもげんきなせりちゃんだ」と書くのと、パパがすかさず、

「いそごうよ。九じまでつこうよはいくえん」と。せわしい朝の苦勞がにじみ出る。

さあ、せりちゃんの番だ。

「うたうのがだいすきたのしいせりちゃんだ」

すらすら出てきた。次から次へと出てくる。

「えんていで、いねをそだててみずあげる」

「おくじょうのはたけでなすのしゅうかくだ」

保育園で野菜を育てているのだとわかる。

「かあさんにほめられにっこりせりちゃんだ」

「きあいがね、とてもはいつたうんどうかい」

パパの絵札も次々完成。握りこぶしのせりちゃんが描かれる。ママもお姉ちゃんもそっくりだ。

息子（パパ）は、小さい頃からよく絵を描いていた。中学生の頃の自作のマンガノートや、授業のノートのはじめに描かれたパラパラマンガ。なかなかの出来で、今になりマンガ家になってもよかったのにな、と内心思うほどである。きつと先生の話も上の空で聞いていたのだろう。

今こそ才能発揮。さすがにどんどん絵札は描き上がる。せりちゃんは忙しい。パパの絵札に色を塗りながらも、私が「さ」と言うのと、

「さあいこう。たのしいさんぽにレッツゴー」

「てをたたき、みんなでダンスをおどろうよ」

「ランドセル、もうすぐわたしはいちねんせい」

ランドセル何色買ってあげようかなんて聞く暇も

ないほど次が出る。

「よるのかぜ、ひゅうひゅうつめたくふいている」
私も書きとめるのに忙しい。せりちゃんも読み札
を書く。大きな字で、「た」を「た」と書いたり、「く
を「く」と書いたり。でも字は上手。

締めくくりは冒頭の「わ」。

「わたしはね、しょうらいアイドルになりますよ」

アイドルになりたいではなく、なりますよと言
切る。

ベイスターズのチアダンスもお姉ちゃんを追い
かけて毎週練習に励む。足を高く上げたり、足を広
げて一文字。びっくり。じいじもハラハラ。かわい
い仕草に笑いは絶えない。

アイドルになったせりちゃんを、じいじと一緒に
見たいものである。

お正月はみんなでぎやかにカルタ取り。今から
楽しみだ。

私の心の世界フランス

慶野 千賀子

いつも心から離れない場所がある。フランスシャ
ルドール空港に初めて降り立った。寒い冬の朝、
そこは別世界だった。フランス映画の中に入った様
な私が別の私になった。

セーヌ川に掛かるミラボー橋にたたずみ、一人
万歳と叫んだ。22歳の時の卒業旅行。感動のロワー
ルの古城。アルル、アヴィニョン、マルセイユ、ト
レットに行きセザンヌが愛したサント・ヴィクト
ワール山を眺めた。

再び訪れたパリは少し大人びた気持ちにしてくれ
た。マキシムドパリに流れるアコーディオンの調
べ、深いワインの味わい。慣れた足どりで歩いた
シャンゼリゼ通りそして凱旋門。若い心に刻まれた
パリは魅惑で溢れていた。

私をフランスへと導いてくれたのはお土産のフラ
ンス人形。中学生の時から憧れの場所。パリの

空の下での曲を耳にする度に懐かしきパリを想う。
長い年月を経て還暦を過ぎた今、不思議にもフラン
スと私の心の距離は近い。

春の嵐のバスツアー

小池 貴瓊子

新聞のチラシに載っていたミステリーツアーにふ
と興味を魅かれて未だ二月初めなのに申し込んで
了った。ミステリーツアー（日帰りバス旅行）は、
一体どこへ連れてってくれるのかしら？と興味津
津。まるで若い乙女のように心が弾み、三月末になれ
ば暖かくなり体も楽になると信じ込んでいた。自
分がもう傘寿を過ぎて決して若くないのは自覚して
いる。

バスツアーの目的地（メーン）は苺狩りと分った。
苺狩りは二、三回体験済みで珍しくないけれど、コ
ロナ禍以来どこへも外出せず、病院とスーパーをゆ
ききする日々を暮らしていたので、どうしても気分

転換が欲しかった点もある。所が当日は春の嵐で風
雨が強く荒れて怖い程。でもキャンセルするのも悔
しいと意地を出して参加すると決めた。その朝は大
きな傘がおしゃかになる程の風。そして激しい雨の
中、集合場所迄やつと辿り着き、ようやくバスに乗
りこみ心より安堵した。高速道路を走り、バスが静
岡県方面に近づく頃は何と空が明るくなり日ざしも
出て、やれ〜と思った。お天気の都合で苺狩りは
後回しとなり、先づ観光したのは『旧沼津御用邸』
の見学で、昭和天皇が御幼少時に、おすごしになっ
たという。とつても広くて沢山の松の原木が潮風で
ざわ〜と騒いで何とも言えぬ風のざわめきが、ま
るで往事の貴人の魂の叫びのように聞こえ、今もこ
の場所に天皇陛下始め仕えた立派な人々の魂が残り
息づいているかのように感じた。往事を偲ぶすが
は確かにあった。

そのあとは観光客専門の大きく広いレストランで昼
食を摂った。一人参加の私は独りの席でも、ちっと
も寂しいとは思わなかった。

昼食後すぐにバスは苺狩りのビニールハウス
へ……。所がお腹が一杯で大好きな苺もあまり食

べられず残念……。お天気さえ良ければ昼食前の午前に苺狩りの筈だったのに……。

最後の観光は『三島大社』。桜は未だ開花前だったが、満開となればきつと素晴らしいと思う境内であり、夜桜は尚のことと想像できた。風雨も止み静かになり、決して好天といえないが、一枚だけ知らない人に記念としてシャッターをおしてもらった。何しろ日帰りのバスツアーで一番格安の費用で全然豪華な旅ではないが、私にとりこれが人生最後の旅になるかも？とそんな気がした。普段古い我が家にお閉じこもりのさみしい私には、息ぬきが出来るか一時をすごせたことはまずく、幸せといえよう。バスの乗り降りも人の世話にならず独自で行動して、時間も厳守して辻堂の駅の近く迄無事にバスは送り届けてくれてさよならした。唯苺狩りで苺を思う存分食べれなかったことが心残りだ。子供みたくに苺の大好きな私は、もつとく一杯苺を食べてみたかったので……。

おわり

雨の日の思い出

斉藤 絹美

何時ごろだったろうか、足の痛みを感じてベッドに起き上ったのはたしか明け方近くだったと思う。外は大雨の様子、窓越しに見える木が大きくゆれている。今日は私の七十六歳の誕生日などいろいろなことを思いながらひと時を過ぎていた時、降りしきる雨音にまじって「バーバ——と声が出たような気がした。そして、トントんとドアをノックする音、私はあわててドアを開けた。そこにはずぶぬれになった孫がいた。びっくりした私は抱きかかえるようにして中へ入れた。「家で何かあったのかも知れない」不安は大きくなってくる。やつと落着きを取り戻した時、おそろおそろ「どうしたの」改めて声をかけてみた。「お母さんが買いた物に行ってきたり帰って来ない。広い家に一人で居るのが恐くなって鎌倉からバーバのところをめざして来た」とふるえながら言った。聞けば途中でパンクした自転車を

押しながら、海岸通りをぬけ、鶴沼小学校の前を通り、川辺に出たと言う。川辺の道はとでもせまく、明治小学校の前を通り、雨の日は道がせまいため、車が一台通るたびに泥水をバシヤ／＼あびながらやつと通りぬけた。小学四年生の孫は学年の中でも、一番小さかったこともあり子供にとつてどんなに大変だったことか。一度いったことのある記憶をたよりに、バーバに逢えると勇気をふるい起して何と三時間あまりもかけて、歩いて来たのだ。

「もう大丈夫だよ、今夜はバーバと寝よう」そこにはやつと安心した孫の顔があった。そんな時、娘からの電話。「子どもがいない。まさかと思うが」緊迫した声が受話器を通して伝わって来た。

「買物に時間がかかって遅くなって」と早口で言った。「ここに居るよ」ずぶぬれになって来たことをあらあ話した。娘もほっとしたことは言うまでもない。あれから十四年たった今でも、その時のことが走馬灯のように思い出して眠れないこともあり、涙が出る。あの時、孫を抱きかかえた記憶がきのこの事のように蘇って来る。

孫にとつては一生味わうことのない恐怖だったに

違いない。青空が晴れ渡った次の日、勇気を誉めてあげながら鎌倉まで送って行ったことなどを思いだし、私の七十六歳の誕生日。九年前の忘れられない雨の日の思い出である。

私の家は、藤沢市遠藤、雨の中を良く来たと思っっている。

そして「バーバの家がみえた時はほっとした」と孫の一言に私も又あの雨の日のことを思いだしている。

自民党総裁選に私が思うこと

榊原 百合子

この秋自民党総裁選がおこなわれた。過去最多の九名がなのりをあげた。私が注目したのは、高市早苗氏だった。高市氏の推薦人は、二〇名のうち十三名が、裏金議員である。

何故、裏金、つまり、脱税にも通じる事をしたのにその人達が、平気で推薦人になれたのか、自民党

はおかしいと思わないのだろうか。一般人は、裏金などしたら、脱税で処罰される。高市氏は、国会議員にも、地方議員にも人気があり、日々の総裁選の中で、圧倒的に上位を守り、ガラスの天井をつきぬけると思った程だった。しかし、結果は、わずかの差で石破茂が総裁となった。私は、まあいいわと思った。高市氏は、かつて総務大臣の時、NHKなど報道に対して「電波中止」などの発言をして人々のひんしゆくをかった事があった。高市氏がならなくてほっとした。

私の様な思いを心の中でした人も、少なくないのではないだろうか。

しかし、石破氏が、総裁選の時は、ルールと守り、原点に戻り、真実を語り、謙虚に、公正公平に、と語っていた。が、どおだろうか。

五回目の挑戦で自民党総裁の座を射止めたら、その舌の根もかわかぬうちに、自民党内部に耳を傾けて、全国民や野党の方々に寄り添い論戦をかわすと言っていたが、それは守られなかった。

すぐ、解散し選挙へとつき進んだ。

裏金問題で処分された議員達も公認もし、比例も

よしとするという。まったくもって、納得と共感内閣と、石破茂自民党総裁は、そして、内閣総理大臣は、国民に受け入れられるだろうか。私達有権者は、正確な情報、信頼できる情報を身につけて、あやまった、あやふやな情報にまどわされずに、問題を考えていかなければならないと思うのである。

そのため、ニュースは大切だ。そのニュースを報道するジャーナリストの人間力に私は大いに期待する。私は毎日一番に新聞を読む。新聞の記事に関心をもつ事は大切だと思う。そして、その内容を、友人達に話し合い、選挙に生かしたいと思うのである。

テレビの画面からは、ひさんな戦争の状況、石川県の能登の災害、悲しい事実が多くある。しかし、新聞記事や、テレビのニュースなど、私なりに受け止め、社会に正しくあるべき行動をとる事が必要だと思うのです。私一人の力なんてと思わず、まず第一歩、民主主義を守ろう。そして、私はニュースは、必ず人々の共感を得て、いつかは、その息吹きは必ず大きな原動力となっていくと思うのです。一人一人の人間の行動は、主権者としての国民の義務なのだと思ふのです。

初めての人

里 香り

高校三年生になった秋日和の日曜日の午後家族と楽しく過ごして居た時突然倉野さんが自転車で自宅を尋ねて来てくれたのでした。暫く玄関先で立話をして居たのですが母が、「折角だからお部屋に入ってもらいなさい」と云ったので父も居間に居ましたので案内しました。遠慮するようすもなく家族の中に入り皆と話し始めました。御実家の話等をして、まだ冷蔵庫もなかった頃なので井戸で瓜とか、西瓜とか色々な物を冷やして食べるとか、家の広いようす又御家族のようすを話して居ました。父とすぐに打ち解けて、家族と共に楽しそうに話して居ました。暫くすると「今日は、お天気が良いので、カメラを持って来て居て近くの公園で写真を撮りに行こうと思うけれど都合はどうか」と云いました。父が「では、姉も共に行くように」との事で近くの大きな花壇とかベンチのある公園に出掛けました。

小一時間程私と姉が花壇の前に座って並んだり、私が、自転車のペダルを片足で踏んだポーズを撮ったり、私と倉野さんの二人で、ベンチに座るようすを撮ったりして過ごしました。する事もなくなりましたので三人で又自宅迄共に楽しく話をしながら帰りました。私は、倉野さんと十分程共に歩き、姿が見えなくなる迄見送りました。一ヶ月程した頃、私が急に倉野さんの部屋を訪れると、二時頃でしたがまだ布団が敷かれたまゝになって居ました。私は悪びれもせずいつものように部屋へ入りました。倉野さんが私を抱いて布団の中へと誘いました。私に手枕をして二人は静かにして横になりました。私も同じように目を閉じて静かな時間が流れたのでした。どちらからともなく衣服の乱れもないまゝ、起きて居ました。二人の間で優しさと、暖さを感じ合って居ました。いつもの帰る時間となり私は明るく「又来るネ」とサツパリとした口調で別れを告げました。彼は優しくほゝえんで静かに只頷うなづいたのでした。ドアを閉めて外に出た私は、優しい気持と心踊るような嬉しさを胸に家路へとついたのでした。

終り

お友達がたくさん出来ました

しあわせ上手の高橋

ソーシャル・ネットワーク・サービス所謂SNSと言われるアプリの中でコミュニケーション・ツールがある。そのアプリのひとつが「クラブハウス」。クラブハウスはどなたでも加入できて、お部屋のひとつひとつが表示されていて、基本的に好きな部屋に入ることが出来る（鍵部屋でなければ）。2020年を過ぎて運用されたのでご存じでない方も大勢いらっしゃるのだがSNSなので日本全国、世界中の人々と意見を交換することが可能で、参加する場合は必ず登録名とパーソナルアイコンを表示するので理解できない言語で唐突に会話することはない。

とは言っても最初会話する相手とはプロフィールに書かれた程度の情報しか伝わらないので、その相手をもっと理解すると、その部屋にはどんな人が参加しているのか理解を深めるためには、昔から

PC上で行われるようなオープンチャットの延長にある「オフ会」に参加してみると、実際の生きた姿に出会えるのだから素晴らしい。

わたしがクラブハウスを初めて知った頃は招待制だった。もともと誰かとコミュニケーションをとるのは苦手だったので、X（ツイッター）のスペースに参加していた。その部屋の方が「クラブハウスに入ってみたら？」と誘ってくださって、孤独と仲良しな毎日だし、相手の本顔もわからないけれど、毎日ラジオ感覚でクラブハウスを聞いている。

「神社についてあれやこれやと語る部屋」があつて、わたしも毎日のように参加していたのでお互い少しずつどんな人なのか理解できていくのが不思議。「しあわせ上手の高橋さん、こんにちは」と挨拶されるようになるし、その部屋にいる人たちの関係性も見えてくる。神社部屋のふたりの屋主は九州人で一般的にいう夫婦ではないけれど、表面的にはビジネスパートナーと言っていたのでまるで夫婦なのである人間関係は現実においても難しい。理解し合えないでブロックされる人もいるし、現実について交流を深める人もいる。

「神社の部屋」でオフ会という名の直会に参加して神社の神主さんにも会えたり、冷えたビール、海の幸山の幸をたらふくいただいた。初めてお会いしたのに皆さん優しく丁寧に接してくれたのだ。

帰り道も教えてくれてほろ酔いながら帰り道である神社の社務所でもとても有意義なひとときを過ごしたことに感謝したのだ。

ほかにオフ会でお邪魔したのは「ガンダムについて語る部屋」「声優・平野文さんと交流する部屋」だ。平野さんのお知り合いで食肉等を提供している方の立ち飲みバーでアルコールと美味しい料理をご馳走になった。変な話パートナーには恵まれないが、たくさんの貴重な経験をしたわたしはとても恵まれているのだ。

文化の日に寄せて

自然

我のみの菊日和とはゆめおもほし 虚子

昭和二十九年十一月三日 宮中参内 文化勲章拝受

昭和二十九年十一月三日、高浜虚子は俳人として初めての文化勲章を受け、感慨をこのように詠んだ。この時虚子の胸に去来したものは、なんであつたらうか。

「思えば、明治・大正・昭和、三代にわたって頑張ってここまでやってきた。若き日に子規と出会い、勧められて俳句を始め、極堂からホトトギスを受け継ぎ、俳句のみならず、和歌、小説など、文芸全般の普及に努力してきた。漱石に小説を書かせたこともあった。病臥している子規からの申し出を断り、しばらくは小説に没入したこともあったが、仲間であつた河東碧梧桐が自由律俳句を指向すること

を知り、私は強く反発し、俳句の世界に戻り、俳句の伝統「花鳥諷詠」「客観写生」「有季定型」を主張し、守り通してきた、あの頃こんな句を詠んだことも思いつく。

春風や鬪志いだきて丘に立つ

その間いろんなこともあった、子規も碧梧桐も亡くなってしまった。碧梧桐とは、たもとを分かって、しまったが、それは方向性の問題だけで、彼は終生の親友であった。言わば喧嘩独楽で彼を弾き飛ばしたようなものだ。これが追悼句だ。

たとふれば独楽のはちける如くなり

戦後になって桑原武夫の「俳句第二芸術論」なるものも出てきて、私も標的にされたが、これを黙殺した、ひたすら伝統俳句の世界にいて、二十万句にも及ぶ俳句を詠み続けてきた。

去年今年貫く棒のごときもの

と詠んだこともあった。そして今日、俳句は我が国の伝統芸術として認められ、わが門弟は全国に散らばり、隆盛を極めていく。子供たちもこの道を志してくれた。

きょうは文化の日、皇居に招かれ天皇陛下から勲

章をいただき、親しくお言葉まで頂戴した。長く生きて、健康で今日を迎えることができたが、もし子規が生きていたらと思うことがある。受賞が決まっていたから十月二十五日、報告の墓前でこう詠んだ。

参りたる墓は黙して語らざる

見渡せば皇居前庭には菊の花が飾られ、それも満開だ。まさに菊日和だなあ」

とまあそんなふう思ったのだろうと想像してみた。「ゆめおもはじ」この句は字余りである。定型にこだわれば収めることもできたのに、あえてそうしなかったのは、「ゆめ」を挿入するほうが良いと虚子の心が、あえてそうさせたのだろう。

この日はこんな句も詠んでいる。

菊の日も暮れ方になり疲れけり 虚子

ねずみ年

篠原貴子

(はまゆう)

一日の活動が終って、疲れと共に深い眠りに付いたのは、十二時頃だったと思う。

寒い冬の日には、暖かい布団の中でぬくもりが何とも言えず、うつらうつらとやまと眠りに付いた深夜のことである。

「助けて」女の人の悲鳴。玄関のドアをすごい勢いでたたいていた。玄関のそばに寝ていた私は飛び起きてドアを開けた。そこには髪ふり乱した五十代位の女性が転がるように入ってきた。「殺される」と一言低い声でつぶやいていた。

只事ではないと感じた私は、消したばかりの石油ストーブをつけて暖まってもらい話を聞こうとしたが、女の人は震えて言葉にならない。ずっと外を気にしているようす。近所の人ではなく顔は知らない。遠くから来たのか、近くの人かも知る由もな

かった。ややしばらくして、落ち着いたのか、着ているものを整えて一時間位過ぎた頃、こうこうと電気の付いている我が家の外に人の影が。

「この野郎、出て来い」と怒声が聞こえ、玄関をドンドンと叩く男性の声。騒ぎで起きた夫は、女性を促して鍵を開けた。外には追いかけて来たのだろうか、大柄の男性が仁王立ちで立っていた。女性はペコリと頭を下げてその人と帰って行った。夫は落着いた口調で「夫婦喧嘩だろう」と言った。それから私にお説教が始まった。「お前は気が早い」「悪人だったら殺されてしまうぞ」「いきなりドアを開けるなんて」そして、「やっぱりねずみ年か」の一言には参った。子ども達も眠い目をこすりながら起きてきて、「お父さんの言う通りだよ」「お母さん、悪い人ぢゃあなくて良かったね」と。

一件落着したのは、時計を見ると午前三時何が何だかわからない中での一瞬の出来事だった。「助けてー」の声は今も耳に残っている。あれからどうなったのかは知る由もないが夫婦喧嘩は犬も食わないとの諺もあるが、反面、喧嘩が出来るほど仲がいいことなのかも知れないと思う。

人生で忘れられない風景

澁谷 恵子

以前、近所の親しい人が、夫に話していたことを聞いた事がある。「奥さんは穏やかな家の中は静かでしよう」との声に「見ると聞くとは大違い。家に来てみるとわかりますよ。ねずみ年ですから何でも集めてくるし、仕事をみつけては忙しくしてますよ、ちよろちよろとね。ハハハ」と笑っていた夫の声も忘れない。「ずい分だ」と思う反面、「そうかも知れない」と思ったりもする。

又遠い昔、祖母がつぶやいていた事を思い出した。「貴子はあちこちで仕事をしてはそのまま。パアチャンはあと片付けで忙しい」私の性格とはいえ、自分では掌握できない面もあることを、近くにいる人は良く見ているようだ。年を重ねた今は、一つひとつのことをゆつくりと丁寧に片づけていると自負している。

68年間生きて来た中で、いくつかの忘れられない景色があります。皆さんもそうだと思います。一つ思い出すと紐付けの様に次々と思いつき出されます。

向かい側の山の上に浮かぶノイシュバン・シュタイン城。城壁から見下ろしたローテンブルグの景色。ロンドンアイから見下ろしたテムズ川沿いの風景。三回目のロンドンに着いたばかりに見た虹の景色。

寒さに震えながら歩いた景福宮の凍りついた池の周り。ソウルのホテルの窓から見た墨絵の様な山々。地下鉄を下りた途端にただよう強烈な生薬の香り。

映画の一場面の様だった夜のベニスの風景。でも、景勝地ばかりでなくて、ローテンブルクを主人と歩いていたら、「ヤパーニヤー（日本人だー）」

と子供に言われたり、日本人とわかってもらえてうれしかったりしました。6月の平日のミュンヘンでは、夕方6時前に父親と子供達がプールに向かう姿にうらやましく、日本では、考えられないと思えました。

名物や美味しい物もいただきましたが、やはり、日本のごはんや、お家ごはんが、美味しくほっとします。国内の忘れられない風景もあります。

近年訪ねた場所は、京都、軽井沢、山中湖、数年前が松江や出雲等です。

松江と出雲は、高校の修学旅行から二度目の訪問でした。神無月には、全国の神様が、集まると言う出雲大社のたたずまいは美しく松江城や湖の美しい夕日が印象に残ります。

京都は、何度かの二条城ですがその歴史を考えて感慨深いです。外国のお城にも負けない將軍の御殿にふさわしい設えです。

久し振りに行った山中湖。私達は、天気の良い日には海岸に行けば美しい大きな富士山を眺める事が出来ますが、やはり、湖の向こうに、大きな美しい

富士山を見ると、日本に住んで良かったと言う思いが湧いて来るので不思議です。

愛犬のモコが今年七月、十六才半で亡くなってしまい一緒に連れて行ってあげられなかったのが残念です。

軽井沢には、何度か連れて行きました。周遊バスにも主人が膝に抱いてのせ、大人しくて、良い子と言われてうれしそうでした。

町立植物園は、犬も一緒に入れて花々や植物を楽しみました。今となっては忘れられない風景です。一番大事な風景を忘れるところでした。

モコと巡った近くの公園の道、砂浜や庭の道を二度と一緒に歩けないのは寂しいものです。

もっと、忘れられない景色を増やして、それを陶板の上にも描きたいと思っていますのでモコ、見ていてくださいね。

ボクらのスタンド・バイ・ミー

竜田孝則

「じえつたいに夫婦岩へいつてはあきませんよ」。校長先生のこの一言が中一のボクらの夏休み、最大のイベントを決定した。

夫婦岩周辺の海底に、米軍の置き土産の20ミリ機関砲の薬莖が大量に沈んでいるらしい。分解して大けがをした子もいたそうだ。

禁止されたら行かんとあかん。行かんと中学生の一分にもとる。

海水が急に冷たくなってきた。深くなったのだ。

何か気味の悪いものが潜んでいてもおかしくないような海の色だった。灯台に近づくと、潮流が巻き込んでおり、自然に背面に吸い寄せられた。鉄梯子につかまって、お互いの顔を見合わせた。唇は色を失い、歯がカチカチ音を立てていた。

「ええか、怖がるな。あとちょっとじゃ」とアニキ

は、まったく思えなかった。

「ほんじゃな」。アニキは荒れ狂う急流に飛び込み、抜き手を切って潮流に乗り、呆然と見守るボクらを尻目に、あつという間に対岸にたどりついた。

そのとき、ボクらはあることに気がついた。

「始めから渡し船で来たら良かったんじゃ」。

なぜ、泳いでくることにしたんだろうか。そうか、あれはボクらの『スタンド・バイ・ミー』^⑧だったんだ。

人生の一時期、それも早いうちに何かに夢中になり、蹉跌^{さだつ}を味わうのも、悪くはない。そう思うことにした。

あれから、65年。一緒に海を渡った友はもういない。だけど、みんなの息遣いや表情が、ありありと浮かんでくる。まだ、みんなはボクの中にいる。

^⑧ スティーヴン・キング『スタンド・バイ・ミー』新潮社、1987年。

は確信に満ちた口調で言い切った。

実際、そこから二十メートルほど泳ぐと、水深はくるぶしほどになった。灯台の先は遠浅になっており、対岸まで歩けたのだった。

遙か彼方の夫婦岩に向かって、不安をふきとばすように、ボくら7人は行進した。

なんとか夫婦岩に到達したが、周りは十メートル以上の深さがあり、とてもではないが、薬莖を捜すどころではなかった。でも、夫婦岩にたどり着いたことで感動してしまった。近くの海岸に上陸したボクラは砂浜に倒れこんで動けなくなった。背中を焼く夏の日差しが何とも心地良かった。しかし、喜びはそこまでだった。急に空気がざわつき始め、海の様相が一変した。鏡のようだった海面は波立ち、渦巻く急流に変貌した。潮止まりが終わったのだ。泳いで帰れない。

「渡し船で帰るんじゃな」と、アニキ。

これから辿らなければならぬ道中を考えると、気が遠くなりそうだった。

はだしである。炎天下である。岩だらけの山道や、溶けたアスファルトのバス道は、素足に優しいと

ウクライナとロシア、 ガザとイスラエルに思う

富安 千鶴子

二〇二二年二月突然ロシアのウクライナ侵略が始まった。プーチンは「ウクライナに主権はない」と言い、メドヴェージェフは「地球上からウクライナはいずれ消える」と言った。ロシアの前身ソ連は消滅し、ウクライナ、バルト三国、中央アジア、ソ連連邦共和国は、独立の道を歩んだはずではなかったか。私は、朝日新聞本社のウクライナの報道写真展に足を運び涙した。そして、ウクライナ大使館へ出向き、現地の報道写真の許可をえて、ソフィアローレン主演の「ひまわり」の映画と共に、「ウクライナの鎮魂」と題して、写真展、映画鑑賞会を幾度となくした。映画ひまわりは、独ソ連の内容で、ウクライナが撮影場所であり、歴史的には両国に痛めつけられた地である。私は、昔日の旅でひまわり畑を実際に歩いたので思いが深かった。そんな折、二〇二

三年十月イスラム組織ハマスのイスラエル攻撃で、イスラエルはガザへ報復した。イスラエルは主権の為の戦争と言い、その様相は凄惨を極め、虐殺そのものだ。一九九三年九月のオスロ合意は何だったのだろうか。イスラエルとパレスチナ自治区は、お互いの存在意義を認めあい、和平交渉が始まったはずだったか。

それに対し国際社会は、どお対応し、見守ったのか。人権を守る、人権を侵害する行為をとめる、そんな合意だったのではなかったか。人権尊重、人道主義は普遍的価値で、国際社会が関与すべきではないだろうか。

二〇〇一年九月、米国多発テロが起きたあたりから、何かが変化し、テロとの戦いを米国は主張し、軍事力による介入が始まったのだ。国際的認知された人道保護の責任は、次第に少なくなっていくた気がする。日々のニュースで目をおおいたくなる凄惨な場面が胸をさす。世界各国が歴史に背をむけることなく、団結して、新たな基準をつくり、動いてほしいと願うばかりである。

一九四五年国連憲章、一九四八年国連にて世界人

大庭城と舟地蔵

中岡裕志

現役の頃、大場氏がいた。歴史好きの係長は、大場氏を時々「大庭景親」と呼んでいた。

管理事務所に寄る。管理人が展示してある上杉氏や太田道灌や舟地蔵などについて説明してくれた。「このライフタウンは、狐や狸や猪も出そうな鬱蒼とした山林だった。令和三年に大庭城跡として市の指定史跡に指定され、大庭城印を作った。辻堂の浮世絵館に一枚三百円で売っているので帰りに寄ってよ」と言う。

横の石積み道の道を登る。明るい。三の曲輪である。まっすぐ歩くと二の曲輪。さらに歩くと一の曲輪である。

奥に大庭城跡の碑がある。

大庭城は、平安時代の末に「大庭御厨」と呼ばれる伊勢神宮の荘園を管理していた大庭氏が築いた。源頼朝が石橋山で兵を挙げたとき、平氏の総大将と

権宣言が採択されたのは何故だろうか、世界第一次、第二次大戦の各国の深い反省からの決別ではなかっただろうか。

「国家主権」、「戦時の民間人保護の国際人道法」この二点は重要なはずだ。主権国家への侵略は許してはならない。そして、戦時でも民間人を殺害しない、当り前の事なのだから。

日本は、一〇二代石破首相が誕生した。経済だけでなく、核をちらつかせる国々に対して、広島、長崎に原爆が落とされた唯一の日本。今こそ、核禁条約に、第一歩オプザバーとして、参加してほしいと願う。日本だからこそ、人間の命の安全保障を第一に考えてほしい。日本が世界のモラル再生の為に力を尽してほしいと願うばかりである。加えて、広島、長崎を訪れ、学び、伝承し、原爆が世界で決して使用される事なく、日本が最後の地であってほしいと願う私である。

して頼朝を攻め、敗走させた大庭景親が知られているが、築城したのは景親の父といわれている。

二三十年ほど経った戦国時代には、扇谷上杉の家宰・太田道灌が大々的に改修、築城した。太田道灌は、戦法にことのほか長じていたといわれる。

その一つは築城術で、その方法は、曲輪式築城法と呼ばれ、江戸時代の兵法家から「道灌かがり」と呼ばれたものである。

平城と独立した曲輪を核に、曲輪と曲輪の間に深い濠をめぐらす縄張りで、近世城郭の祖型となったものである。

その道灌が扇谷上杉定正に暗殺された後の永正九年（一五一一）、北条早雲が扇谷上杉氏の大庭城を攻めた。この時の城主は、定正の子・朝良である。

この時、大庭城の南側には沼が広がっており、北条勢は攻めあぐんでいた。

伝説によれば、この時、北条方は付近の老婆から「この沼は、引地川の土手を切れれば水が引く」という話を聞いた。

すると口封じのために老婆を斬り殺し、すぐに沼を干し上げた。

北条方はやすやすと大庭城を攻め込み、落城させることに成功した。

里人は老婆を憐れみ、城下に地蔵を祀って弔った。小糸川に架かる大庭橋の袂にある舟地藏がそれである。

南入口を出る。舟地藏に手を合わせる。

帰りは、辻堂の浮世絵館に寄って大庭城印を買うことにした。

鎌倉街道で想うこと

永澤 征治

八十才の半ばとなると、毎日は無理だが、朝の散歩は大事な日課である。散歩のコースは、辻堂太平台から浜見山を通って辻堂海岸に出る道だ。途中、京都と鎌倉を往還する鎌倉街道を横断する。その時は何時も源頼朝という人物を思い出す。頼朝は生涯かけて京都の王権と対決した。鎌倉街道を綱引きの綱に例えれば、京都を少しでも鎌倉に近づけようと

綱を引っ張り続けたということである。平家を亡ぼし、奥州藤原氏を倒した後、つまり挙兵から十年経って、漸く上洛し、後白河法皇と、摂政の九条兼実（兼実）に頼朝は会った。それは、父義朝が朝敵として平清盛に討たれ、十三才の頼朝が二十年の流人生活を送ったのは違法であることを訴える為でもあった。平治の乱を起した義朝は二条天皇の命に従っただけであり、熊野から京へ帰った清盛側に後白河が付くと一転して天皇は源氏の義朝を朝敵とした事実を指摘した。

又、地方で実力をつけてきた武士団を無視した京都の日本統治体制は、もはや時代遅れであることも主張した。源頼朝の人物像は、一つは自己主張と行動に一貫性があること、二つ目は、時代の流れを先取りする能力に優れていたことであろう。三つ目と云って、だろうか、頼朝は女性運があった。生命乞いをしてくれた清盛の継母池禅尼、二十年の流人生活を物心両面で援助した比企尼、將軍としての頼朝を支え続けた北条政子がいる。

頼朝を尊敬していた徳川家康は、頼朝が鎌倉街道を通じて鎌倉へ帰る途中、辻堂辺りで落馬し、それ

が元で死に至ったこと、これは武家の統領に相応しくないとして、鎌倉幕府の歴史書「吾妻鏡」の中の頼朝の死の前三年の記事を永久欠書にしたと言う説がある。中世の歴史研究者は異説を主張しているが、私は、この家康説を好ましく思っている。

今年の秋は、九人が自民党総裁選に立候補し、衆院選もある。国民は皆、「真のリーダーとは」を充分考えさせられる機会となった。

今、歴史上の人物、源頼朝や徳川家康を、再研究してもいいのではないだろうか。

（令和六年十月十六日）

オクラで元気に

ネ コ ス ケ

ビタミン、ミネラル、食物繊維が豊富なオクラは、夏のスタミナ野菜です。栄養効果も優れていて、ネバネバ成分はコレステロールの減少や血糖値の上昇抑制、高血圧の予防にも役立つそうです。

我が家では毎年、オクラを種から育てています。

四月末頃に種を蒔くと十日程で発芽します。その後間引きをし、本葉が二〜三枚になって畑に植え付けます。上手に付かず枯れてしまう苗もありますが、何本かは無事に育ってくれて、収穫ができています。

オクラは、花も楽しめます。クリーム色の花びらに中心が赤紫で、ハイビスカスや芙蓉の花にも似ています。花言葉は「恋で身が細る」だそうです。花は咲いても一日で落ちてしまいます。その後、ほっそりとしたオクラになることから、美しい花はかない恋の気持ちを表しているような気がしますが、花が咲いた後、実が上向きになるというのもめずらしい野菜です。

オクラは種が二百円足らずで購入できて、収穫期が七月〜十月中旬までとコスパ最強の夏野菜です。ただ、ピーク時に大量収穫となり、消費するのに苦労しています。

友人、ご近所にお裾分けするのはもちろん固ゆでにして冷凍保存もしています。癖もなくどんな食材との組み合わせもできますが、朝食の味噌汁に入れ、汁ごと栄養を摂ると一日頑張れるような気がし

ます。

今年の猛暑もオクラパワーで乗り切ろうと思っていた矢先のことです。突然、腹部に痒みと発疹が：年齢的に帯状疱疹では？と不安になりましたが、とりあえず薬局に駆け込みました。薬剤師さんの話では、毛虫などによる虫刺されではないか、とのことでした。思い当たるのはオクラの収穫です。無農薬で育てているため、どうしても毛虫やアブラ虫が発生してしまいます。長袖、長ズボンに手袋と注意はしていましたが、甘かったのかもしれない。ステロイド軟膏塗布により、二週間程で痒みや発疹はようやく治りました。オクラに付いた毛虫が原因とは言いきれませんが、それ以降は、虫よけスプレーでの対策もし、十分注意しながら収穫するようにしました。

とんだハプニングもありましたが、毎年残暑の厳しい九月初旬に受ける人間ドックの結果が良好なのは、オクラのおかげかしら？と勝手な思い込みをしています。

日々雑感・その一

蓮 池 タカオ

昔々のこと

私が六才頃の話なので、随分と昔のことだ。七十二年も前のコト。

当時、私の家、家といっても六軒棟続きのハーモニカ長屋。そのとぼっ口に住んでいた。

北国、雪が二メートル以上降る豪雪地帯で、地図の上から見ると、青森県のすぐ南、岩手県と秋田県の県境、とに角山ばかりの辺境であった。空は山に囲まれた船の底のように細長く、何も無い集落で、五十世帯ほどの家々がべったり肩を寄せ合っていた。

長屋なのでトイレも流し(台所・調理場)も共同であった。小学生の頃、母の体調が悪く私がこの流し場で米をといだ時のこと、米がサラサラと水と共に流れていった。初めての経験で、どうしていいのかわからなかった。

「オジチャン、あの犬どこへ行ったの。」

・・・「食った。」

最初、何のコトがよく理解できなかった。犬を食べた。・・・そんなコトあるの？。

昭和二十六・七年当時食糧事情はよくなかった。食べられるモノ、食出来るモノなら何でも食べたのがその時代だったのだ。

山に行けば、山菜、ワラビ、ゼンマイ、キノコ、蕨、アケビに山葡萄、野イチゴ、運よく出会えて獲れるものは全て、口に入れた。

集落には、キノコ採り名人とか、冬には雪の中、毘で野ウサギを手に入れてくる名人もいた。

かくして犬はいなくなった。先日、TVで中国の大きな祭で犬が店先に何十頭も積まれているのを見て、犬を食する文化は普通なのだ。というのをしみじみ理解した。

ま、昔々の話ですが。・・・。当時こんな言葉を普通に聞いた。一赤、二黒、三白。何？・・・。

「タカオちゃん、お米が流れて行くよ。」と、隣家のおバサンが親切に米をとぐことを教えてくれた。生きるには、食せねばならない。その為には、まずご飯を炊く、その前にお米をとがなくてはならない。小学一年生の頃かなあ。

子供心に知った初めてのの人生修業だ。まあその頃はそんなコトは全く感じなかったけど。

いなくなった犬

隣に元気なおジサンが住んでいた。

そのおジサンは大きな黒い犬を飼っていた。子供心に大きく見えたその犬も、今でいう中型犬か大型犬の間ぐらいの大きさであったのだろう。愛嬌のある犬で、私にはすぐ慣れ、私も好きになって可愛いがった。

半年近く見かけたその犬が、ある日突然いなくなった。

どうしたのだろう。どうしていないの？その辺を探したが見つからなかった。

夕方、隣のおジサンが仕事から帰って来たので早速聞いてみた。

人間ぼんざい

畑 昌子

昨日の雨がうそのように晴々とした、文化の日——。犬を飼いはじめてから毎朝の散歩はかゝせなく、雨の日も風の日も、犬に曳かれてしぶしぶ歩いているが、いつの間にもやら足がスムーズに動くようになった。空ちゃんいいこだネ。娘がなけなしのお金で買った犬の名は、空海、おそれおおくも真言宗開祖、身分を問わない学校も設立した。不思議なもので、どこの犬より、いゝ男だと自負している。犬は外で飼うもの、まして上着を着せたり、家の中で飼うなんて—そんな私の意見も二日で崩れ……。娘の言うがまゝの日常である。

世の中は殺戮、戦争、ドロボー、混沌とした世相の中……何かすまぬと思ひながら小さなこの幸せを想う——。どうしたの—違うじゃないこのペンの持つて行き場は！もう一つの心が語り出す……でもネ——文化の日に海で釣りをするけど、つった魚

は海に帰すので「ママさんにおみやげなし」……？店の客に言われた。チョットいじわるな笑顔に、私これを書きたかったと思う。人間いゝね！いろいろあつて。

着ぶくれて舌でころがす金平糖

危険な、泣き声

畠山正樹

今年のゴールデンウィークの最終日は5月7日の日曜日であった。丁度、一年前から私は毎日の昼食は外食で決めていたのであった。それは、家内が体調を崩して入院や手術が重なっていたからであった。このゴールデンウィークに入ってから、この街の人の動きが緩慢になったような印象を受けていたのだが、最終日の7日となると国内ばかりでなく海外旅行をしてきた人たちが帰って来たのである。人通りに活気が戻って来たと感じながら駅の方に向かって歩いていたのであった。

江ノ電の高架線を右上に見ながら左手にはコンビニがある辺りで、前の方から大声で泣く女の子のすさまじい泣き声が耳に入ってきたのであった。その泣き声は耳にというより心に突き刺さるような激しいものであり、このままでは引き付けを起こしかねないと思うほど聞きなれない激しい泣き声であったのである。どうなっているのだろうかと心配しながら前に進んでいったのだが、OPAという多くの専門店が入っている雑居ビルの先の方の歩道で父親の腕からのけぞり反って車道にはみ出さんばかりの勢いで激しく泣いている二、三歳かと思われる女の子が目に入ったのであった。この辺りは、一段と人通りが多くなっていたのだが女の子の泣き声は周囲を圧倒する激しいものであった。父親と一緒にいるのだから声の掛けようも手の出しようも無かつたので、私が右手に二人を見ていた時、赤ん坊を胸に抱き車輪の付いた旅行カバンを押しながら母親が追いついて来たのであった。

ああ、これで一段落がついたのかと思ひながら私は駅に向かって十メートル程進んだのであったが、依然として女の子の泣き声は落ち着くどころか

更に激しいものになっていたのであった。何があつたのだろうか、何が起こっていたのだろうか、どうしてあげたらいいのだろうか、と思ひながら人込みの流れに沿って足は前に進んでいる時に、泣き声の中から『オジちゃんイヤ』という言葉が発せられたのであった。私の足は止まりチョット左寄りに体を寄せて道を開けたのであったが、その所からは女の子と両親の姿を見ることは出来なかつたのであった。

この声を聴いて私の胸は痛んだ。あれはパパではないのか？？？ オジちゃん？？？ では、ママの胸の中にある赤ちゃんは？？？ と複雑な思いに捕らわれてしまっていた。それにしても、あの激しい泣き方から早く解放して貰わないと危険なことになりかねないと心配が募るばかりであった。どうか、平穏な日々を送ってくださいと祈るばかりである。

「ありがとう」と云われて

林 田 繁 雄

「親孝行、したい時には親はなし、さればとて、墓に布団は着せられず」

このセリフ、御存知ですか？

小野安二郎監督の「東京物語」を見ている方なら、気付かぬはずはないでしょう。映画の後半に差しかかり、母親が列車内で急病になった時、更に、母親の臨終に間に合わなかった時と、二度に渡って鉄道員の三男に云わせているのです。

ちょっと人生を分かったような余裕の響き。実際に、何だか使ってみたくなるではありませんか。

「墓に布団は着せられず」映画の細部は忘れても、この云い回しが浮き上がって来ます。それだけ魅力的な言葉です。

では彼は、どこでこの言葉を仕入れたのでしょうか。何か資料の中から見つけたか。グーグルで調べても、東京物語の例しか載っていません。

私は推測します。

実際にどなたかの臨終の場に立ち会うことがあって、近しい人から直接聞かされた。その具体的なイメージに、映画で使いたいと思ったに違いありません。(着物を使った云い回しもあるのに布団を選んでいます)

実は、私にもそういう経験があるのです。

もう一週間で百歳まで生きたはずの元気な伯母との話です。九十過ぎまで家政婦として働いた伯母とは滅多に会うこともありませんでしたが引退して老人ホームに訪ねるようになってからは、父の話、関東大震災の話、すぐに時が過ぎました。般若心経を唱える時の力強い声。

亡くなる前年の真夏の暑い日に訪ねた折でした。一緒に飲もうと、冷えた缶ジュースを持ち込みましたら、館内の涼しいこと、これでは、伯母が腹をこわすと、テーブルに置きました。そろそろ飲み頃と缶ジュースを手にとると、テーブルが水滴で、水びたし。

アラアラ何か、と顔を上げるとティッシュが、目の前に。「アラッありがとう」と礼を云うと、即座に

返って来たのが、

「ありがとうならいもむしゃはたち」

「?」ポカンとしてしまった。

二度程、繰り返されて、何とか見当がついた。「有難トウナラ、芋虫やハタチ」

「蟻が十なら、芋虫や二十」

虫の大きさを年令に当てはめているのか!

ハジメテ聞いた、このナンセンス。おもしろくて、頭の中を何度も繰り返す言葉。

伯母は、誰からこの言葉を聞いたのだろう、伝えられたのだろう。初めて知った、父から聞いたことでもない。タイミングだっただけ肝心だ。直接、人から云われて、言葉が破裂することの素晴らしさ。今度は、私が誰かに発してやろう。

付け足しを。「蟻が鯛なら、芋虫や鯨」

姪のフォトウエディング

松 本 実知子

(てっせん)

弟から来たメールは、長女のフォトウエディングの知らせだった。姪は新郎と共にブライダル写真を撮り、その後親族の食事を催す予定とのことだった。婚礼披露の会は、二子玉川高島屋にある写真館で行われる。二時から洋装で、四時からは和装での撮影会となり、その後カジュアルな食事会となる流れだった。

指定の日は二週間後だが、あいにくなことには有償ボランティアで働いている当番の日だ。しかし、この祝い事には参加せずにはいられない。仕事仲間に変更してもらわなくては。夫の出席の可否も確かめよう。

急いで数人に問い合せたが、メールに返信の無い人や、メールアドレスの登録間違いであたふたしてしまった。しかし、二日ばかりであったが、無事交

替してもらえた。良き仲間の存在を有難く思う。

次の心配は、平服でとの記述だ。正装でと言われても大変だが、平服でお洒落な服とはどんな装いが良いのか。人によって考えは千差万別だろうし、アクセサリーも何を付ければ良いのだろうか。三月三十日は、暖かいのか冷えるのか。この季節、気温は日によって大分変わる。コートは薄手が良い。上着は考えるまでもなく、お洒落なものは何も無い。何年も、セーターやTシャツといったカジュアルな物しか買っていない。ハンドバッグも古い黒のバッグがあるだけだ。

最終的には、レース柄の上着に紺のズボン、青のバッグを新調。締めて一万円程で上った。平服で、という言葉は素直にとることにした。夫は都合が合わず、欠席となった。

フォトウエディングなるものといえば、新郎新婦の和、洋装の晴れ姿を写真館の人が撮影する。その後、七人の親族全員もスマホで写真を撮るのだ。

写真館のスタッフが撮影時、

「もう少し寄り添ってください。新婦さんは、旦那さんを見上げてください。良いですよ。その表

情、素敵です」

等々、手や足の位置、顔の角度に色々と注文を付けるのには驚いた。特に花嫁には、体勢や表情にも細かく指図し、あおるように話しかけて、素敵なおフォトに仕上げようという熱気が感じられた。

「あー、疲れた」と言う花嫁の言葉に実感がこもり、少々同情してしまった。

一休みした後はおしゃれなレストランへ移動。ビールを少々飲み、凝った前菜、お造り、唐揚げ、鍋、雑炊、杏仁豆腐等々、とても食べきれないご馳走をいただいた。おしゃべりにも花が咲き、あつという間にお開きの八時になっていた。幸せのお裾分けを頂いた気分だった。

素敵なお一日をありがとうと、新郎新婦に胸の内で語り掛け、急ぎ帰路についた。

感動すること

松 与 常 清

自分は何一つ、才能にも何も取り得べきものがない。現在七十五歳だが、人生経験もこれといって身につけているものがない。喉もと過ぎれば熱さを忘れるのである。その代わり自分で言うのもなんだが、感動することだけは人並みだと思っている。人間美、自然美、芸術美に対し一応人並みには感動している。この感動することを取り去ったら自分には何も残らないのだ。生きる意味さえあるだろうか。人並みに感動できることで鼓舞される。苦しいことや悩みがどんどん襲ってきて死をも思ったりする絶望の時もあるが、感動の至福を感じる時もある。人間美、自然美、芸術美に触れ得た時の感動といったらない。たとえ人生否定、人間否定に陥る事があってもいつの間にか人生肯定、人間肯定になっていることに気付くことがある。それは愛する女性に出会った時に生きる力を得ることに似ている。

る。真つ暗だった人生が愛の力によってパッと明るくなることに似ている。

愛することと感動することは何と似ていることだろう。飛躍するかもしれないが、人間美、自然美、芸術美への感動も一つの愛ではなからうか。愛とは感動とは対象への肯定、讚美ではなからうか。

それらは生きる力、鼓舞をもたらしてくれるのではなからうか。精神の高み、魂の高みへと運び連れていってくれるものではなからうか。

自分は感動すること以外には何もできない。それでもそれによって救済されているのかもしれない。人は美しいものに魅かれるものだろう。美しい人間、美しい自然、美しい芸術。美しいものに心洗われ、感動することによって肯定、讚美する道へと歩き出すのではなからうか。

七十五歳まで生きて感動することだけしかできない自分だが、心身ともに老いを感じもする自分だが、感動することはフレッシュな思いにもさせてくれる。

この年になってまだときめく思いも残っている。老境、余生という思いにはまだ到っていないが、感

動するということだけは忘れてはいけないと思う。
人間美、自然美、芸術美に死ぬまで感動し続けた
いと思ってる。

これから先のことも神様だけしか御存知ないのだ
ろうが、積極的成り行きまかせで、美しいものに感
動し続けていきたい。

どんなに苦しいことがあって悩むことがあって死
にたいと思うような絶望感に陥っても感動すること
によって打破し鼓舞されていきたい。

感動することによって、どんな状況も乗り越えて
いけるのではないかと思ってる。

そんなことは出来っこないよという悪魔の囁きに
も負けず。

ハーモニカ クラス

儘田 加寿子

月二回のハーモニカクラスが、あります。そのク
ラスの生徒になりました。

電話をかけた時、まさかクラスに入れてもらえる
とは思いませんでした。
多分、年令で断られるのが、当り前と思っていま
した。息子いわく。「お母さん、先生は気持の大きい
人だね。ぼくだったら即く断るよ」と言い、自分か
らやめてはいけないよと、いいました。

月二回の土曜日の午前中教室へ通っています。ク
ラスは十人ほどで、ベテランばかりで、みんな楽し
そうに練習しています。

ハーモニカは簡単だと思っていたけれど、さにあ
らず、むずかしい楽器です。

子供時代、ハーモニカは習いません。

友人達とハーモニカを吹いたことはあっても、遊
びの場です。そんな私をクラスの人は暖かく迎え
入れてくれました。

二年の月日が流れました。

ハーモニカは、むずかしい楽器です。

でも、あの小さな楽器から、すばらしい音色が出る
ものだと、感心しながら、練習しています。いつか、
クラスの人達と一緒に、私の故郷の「椰子の実」を
演奏したいです。それが私の願いです。

瀬戸大橋回想録

森 眞彦

昭和三〇年五月十一日、濃霧をついて高松港を出
港した国鉄宇高連絡船「紫雲丸」が僚船と衝突して
沈没した。そして修学旅行生ら百六十八人が死亡す
るといふ大惨事となった。この紫雲丸の事故は、私
が高松市立紫雲中学校二年生の時であり、校舎の屋
上から多くの小船が救助にあたっている様子を眺め
ていた。この事故がきっかけとなり、一段と本州と
四国間に橋を架けるという運動が燃えあがった。

その後、紫雲中学校から高松高校を経て京都の大
学へ六年間通うことになった。その間は宇高連絡船
にもっぱら乗船して帰省した。そして家族との別れ
を惜しみ、また再会を喜んだ。その後、縁あって土
木技術者として、昭和四十一年に当時の国鉄に就職
した。そして東京と地方の転勤生活を繰り返して
いた。そして昭和五十九年三月に本四公団に出向
となり、瀬戸大橋の工事を担当する第二建設局に配

属となった。

実際に橋を架けるための組織、本四公団が設立さ
れたのは昭和四十五年七月であった。当時すでに、
本州と四国間の連絡橋案の本格的調査が開始され
ており、現在の三ルート、明石・鳴門ルート、尾道・
今治ルート、そして、岡山と香川を結ぶ瀬戸大橋架
橋は、児島・坂出ルートに決定されていた。瀬戸大
橋ルートは道路と鉄道の併用橋であり、このルート
の海峡部約十キロは瀬戸大橋として親しまれている
吊り橋、斜張橋、トラス橋で結ばれる世界に例をみ
ない長大橋梁群であり、わが国の橋梁技術の粋を結
集して建設されるものである。このルートは昭和五
十三年十月十日に起工式を迎え着工していた。

工事が完成したら、海中に沈んで人の目に触れる
ことのない基礎の工事は、潮流が速く、深い海面下
に頑丈な基礎を築くために並々ならぬ創意と努力が
必要であった。着任した頃の工事現場は基礎工事が
終わり、その上に建つ橋台や橋脚の工事が最盛期で
あり、ケーブルなどの上部工事にも一部着手して
いた。着任して二年四か月の間、工事現場の巡回や
見学者の案内には本四公団所有のモーターボートに

乗船して瀬戸内海を歩き来していた。お陰で世紀の大プロジェクトを間近に見ることができ貴重な体験になった。瀬戸大橋は、昭和六十三年四月十日に、道路と鉄道の併用橋として同時開通した。

昭和六十二年四月に国鉄は分割民営化され、私は国鉄清算事業団に移った。そして昭和六十三年十二月に高松にあった資産管理部に勤務することになった。家族を東京に残して単身赴任したため、JR瀬戸大橋線にしばしば乗車することになった。

このように回想してみると、紫雲丸の事故から始めて、宇高連絡船の乗船、瀬戸大橋の工事参加、JR瀬戸大橋線の乗車と、瀬戸内海との縁の繋がりを感ずる昨今である。

引地川親水公園の散歩

山下 一馬

人にはそれぞれ日常のリズムがある。私のリズムは朝5時起床、朝食後6時すぎに家を出て東海道線

で東京に通勤していた。退職後このリズムを継続することにして5時30分から引地川親水公園まで散歩を始めた。自宅から舟地藏公園まで約1km、交差点を渡って小糸川沿いに歩き、城下橋を渡って引地川沿いに親水公園に向かう。そこに小高い丘があり、丘の上から富士山が真正面に見える。ここで軽く体操をして、芝生の広場を通過して天神橋を渡り大庭スポーツ広場球技場、多目的広場、ドッグパークを折り返して、舟地藏公園の交差点を渡り家に戻る。約4kmの距離だが1時間30分くらいかけての散歩になる。4月から10月までは日の出時間が4時から5時台で明るく、11月から3月までは6時台で、5時30分からの散歩は懐中電灯を持たないと暗い。人によって冬の間は散歩時間を日の出に合わせてずらす人もいる。私も寒い日は布団にこもり、時間を遅くしたいと思った。しかし私の体内時計は日照時間に左右されず標準時なので変えないことにした。冬時間には満天の星空が広がり、北斗七星と北極星が見える。日の出時間が早くなると、毎朝富士山が姿を変えて見え、朝焼けに照らされ紅く染まったり、冠雪した雪が輝いたりする。親水公園は引地川

の西岸と東岸にまたがり、西岸には球技場、多目的広場、ドッグパーク、東岸には大庭神社のあるふるさとの森に面していて、湿生植物園、子供の遊具施設、藤棚がある。このあたりは湿地帯で小糸川と引地川により、大庭城跡の南東部に水が溜められると外堀となった。過去には大庭城の西側は横堀、堅堀、土塁で固められた難攻不落の城となっていた。

現在は遊水池で南側に田畑が広がる自然豊かな公園となっている。2月には梅の木が花を咲かせ、3月初めころから河津桜が咲き、4月には川沿いがソメイヨシノの桜並木となる。また小糸川沿いに土筆も出て春の始まりとなる。5月にはツツジ、フジ、6月には紫陽花、7月にはねむの木が花を咲かせる。

9月中旬には金木犀の香りが漂い、やがて秋の紅葉を迎える。毎朝いろんな人に出会う。健康のため、気晴らしにぶらぶら歩く人、ご夫婦で散歩、ジョギングする人、犬の散歩、友人と話しながら歩いている人、望遠レンズ付きのカメラを持って野鳥を観察する人。中には高齢で、毎朝公園に来ることが生きている証で、「ありがたい」と富士山を拝む方もいる。毎朝富士山の姿について話をする人に出会う。

「旧東海道五十三次」を歩く

山成 健治

山口県の山陰地方の田舎で生まれ育った私は、小学校に通うようになると、片道、約三キロばかりの舗装されていない道を毎日、歩いて通った。登下校には、各一時間近くを要したが、その間には、四季折々の草花や、トンボ、バッタなど、様々な昆虫類に出会うことが出来た。このため、当時の私

“The early bird catches the worm.”

にとつては、通学すること自体が楽しみの一つであった。

妻は、北海道の帯広市郊外という、私とは遠く離れた所の出身であったが、私と同様に自然の中を散策することが好きであった。そうした私どもの所に、ある旅行社から「旧東海道五十三次を歩いてみよう」という案内が届いた。二人共、ウォーキングは好きであったので、「チャンス到来」とばかり、参加することにした。

旅の初日、一緒に歩く仲間を見ると、比較的若い人も居たが、中・高年の方が大半であったので、何となくホッとした。歩きが始まると、先頭には旅行社関係の方がマイクを持って、ガイド役を務めた。我々二人は、ガイド役の方の話を聞き漏らしたくなかったので、常に先頭集団に居るように努めた。

東京都内から神奈川県を過ぎる迄は、以前、私たちも歩いたことがある道を通ることが少なくなかった。しかし静岡県に入ると、初めて歩く道ばかりとなり、進行方向の左手には、太平洋が延々と広がるようになった。静岡県が、いかに海(太平洋)に面した県であるのかということを変更して実感させ

られた。

愛知県からは、海を離れて陸地を歩くことが多くなった。また、静岡県迄は聞き覚えのある地名が大半であったが、愛知県から先は、初めて聞く地名が殆どとなった。先頭集団を歩く顔ぶれも、静岡県迄の時とは違った人が増えていった。恐らく、海を中心とした静岡県迄の行程と、陸地ばかりの愛知県以降の行程とでは、目にする風景のニュアンス等が大きく異なるので、それに応じて先頭集団の顔ぶれも、自ずと異なっていたのである。嬉しかったのは、予め定められていた途中の休憩地で、妻も私も、昔の仲間(友人)との旧交を温める機会を得られたことである。

出発の日から数えて四十八日目、最終目的地である京都の三条大橋に、何とかたどり着くことが出来た。

それにしても、東京―京都間を徒歩で歩き通すなどということは、今の時代においては、何と、大変なことであろうか。改めて、昔の方々の強さ、とりわけ我慢強さに、深く感じ入った次第である。

西田天香師

横田 佳代子

リーマンショックの時、主人の会社も大きな打撃を受けた。毎日毎日、これからのことを考え、胸がつぶれる思いであった。その時、西田天香師の孫である西田多戈止先生より一枚のお皿が送られてきた。そのお皿には、西田天香師が最も好んだ「無一物中無尽蔵花あり 月あり 楼台あり」の書があった。そのお皿を飾り、書を見ていく内に、「空には、美しい月がある。春になれば、美しい花が咲く」急に豊かな気持ちになり、命が甦ったように、明るくなった。

「人間はもともと無一物で生まれ、生命さえも、授かったものです。無一物、無所有こそ人間本来の姿である」「生命は与えられたものであり、従って、食は天から恵まれて与えられている」と、天香師は訓えている。

西田天香師は1905(明治37年)年「宇宙の

大生命の中にその身を委ねる」「生活を重視し、奉仕と経済活動を通じて平和の役に立つ」ことを願い一燈園を創設した。

洪沢栄一氏も「論語と算盤、道徳心を持って人の為に働き、経済生活に全力を尽くす」ことを教えた。洪沢栄一氏の教えを実践した稲盛和夫氏も、「宇宙の法則はすべてを成長発展させる方向へと導く」「人が心を磨き、素晴らしい人格を形成していけば、宇宙が支援してくれるのだ」と述べている。

タゴールが1916(大正5)年来日した。日本女子大学を創設した成瀬仁蔵教授、姉崎正治東大教授、洪沢栄一氏、大隈重信総理等が歓迎し、もてなした。その時通訳を務めた高良とみ女史は、後に、女性で初めての参議院議員となった。タゴールと盟友の、ガンジーを訪れ、直接、糸車(チャルカ)を恵与された。

高良とみ女史は、チャルカを日本のガンジー、アジアの聖フランシスコと呼ばれていた西田天香師に託した。2010年インドで開催された平和会議に、そのチャルカを西田多戈止先生が持参。ダライ・ラマが最初に糸を紡ぎ、137名が続いた。糸

は80メートルを超えた。

生きていると、困難な問題に直面する。その時、天を仰ぎ、朝日を拝む、鳥の鳴き声に、一輪の花にも、心が癒される。余分なものを捨てて、感謝の心で、最善を尽くして、笑顔で時を待つ。

「そうすれば、助けてくれる人が必ず現れる。そして、宇宙の大生命が必ず一番良い方向に導いて下さるから安心して良い」と教えて下さっている。

天香師は、日常の生活における実践行として、トイレ掃除と懺悔を勧めた。トイレの掃除により下座の修行をし、懺悔によって、心を清めた。欲を捨てる事。光明祈願の生活、いつも明るく笑顔でいること。人様の幸せを願う徳の高い人々と共に活動することを勧めている。

100歳を超えた百長寿者(センチナリアン)の中に、超越的多幸福感を持つ人が多いと言われている。それは現実の状況に左右されない幸福感であり、「今ほど幸せな時はない」といつも感謝の心で、微笑んでいる心境である。このような幸せな心境になれることを祈っている。

一話一句

吉田 邦男

(文芸光風)

起承転結

私の座右の銘は、起承転結だ。起承転結とは漢詩の構成法のひとつで、起句で詩意を云ひ起こし、承句でそれを受け、転句で素材を転じ発展させ、結句で全体を結ぶ。転じて、物事や文章の順序・組立にも使ふ。常に身近に備へて戒めとする格言とは少し意味を異にするが、これが私の座右の銘だ。

中学時代の恩師岩波昭和先生の国語の授業を初めて拝聴したのは一年生の初夏の頃だ。担当の先生がお休みで代りに来られたのが岩波先生だった。先生は国民服と云ふのだから、カーキ色の作業着にゲートルを巻ひてをられた。断つておきが一九六二(昭和三七)年頃のことだ。先生は六尺程の棒を巧みにあやつり、身振り手振りを交へて、

大坂本町糸屋の娘 姉は一八妹は一六 諸国大名

初秋の散歩

萬 眞 一

今年の夏は暑かった。9月に入っても35℃を超える日が多く、こんなに暑くてはとても散歩をする気にはなれない。家の中に閉じこもり、エアコンに助けられながら、ひたすら涼しくなるのを待っていた。

9月23日、窓を開けると驚くほどの冷気が部屋の中に入ってきた。昨日のぐずついた天気と違い、空は青く澄み渡っている。

9月になってから、俣野別邸跡にある植え込みのオミナエシが気になっていた。早く行かないと花が終って可憐な姿が見られなくなると。少し遅いと思いつながら、秋の七草を求めて別邸跡に出かけた。

陽の光が和らぐ午後4時前に着くと、すぐにオミナエシのある植え込みに行った。まっすぐ伸びた茎から出ている黄緑の枝の上に、黄色い小粒の花が集まり、上が平たい形で咲いている。光を受けて鮮

は弓矢で殺す 糸屋の娘は目で殺す と、起承転結の解説をされた。糸屋の姉妹はさぞかし美人なのだろう、一度で良いから目で殺されたいと思った。それからは先生の授業を拝聴するのが楽しみになった。好奇心が学習意欲を掻き立てたのかも知れぬ。将来は国語・国文法・江戸の文芸を学ばうと思ふやうになり、長じて先生のやうに生徒を惹きつける授業ができる教師になりたいと思った。「大坂本町」は江戸後期の学者、頼山陽或いは梁川星巖の作らしいと分かったのちも岩波先生への敬意は変はらなかつた。

日々の雑務に追はれ、満足な教材研究もできぬまま教壇に立つやうになり初心を忘れかけたとき、起承転結を思ひ出す。これもやはり座右の銘だ。

近頃、教員のなり手がないと云ふ。長時間労働、理不尽な要求をする保護者、結婚相手に教員は除く等々ブラックな職業だからださうだ。

バス待てど来ず 大路の春遠し

やかな黄色を浮き上がらせ、時折吹くそよ風になびいている。

だが黄色く咲いているのは数本で茶色に変わっているものが多い。昨年より本数は少なく、背の低いカヤが茎の高さを半分以上隠している。今年は猛暑で手入れが出来なかつたのであろう。

すぐそばにはフジバカマもあつたはずだが見当たらない。カヤの中を覗き込んでみたが見えないし、フジバカマを好むアサギマダラも飛んでいない。ここに来れば七草のうちの2つは見られると思つていたのに。

広場の下の方に入っていくと、風に吹かれて枝先の花が揺れている。ハギである。しなやかな枝が何本も伸びているが、今年は花が少ししか付いていない。

色は赤紫で、一つ一つは蝶々が羽根を広げたような面白い形である。大きさは1センチから1・5センチと小さく、数個が一緒にうつむくように咲いている。

別邸跡を出て東側の谷戸へと降りて行った。この谷戸は小さな川が流れ、平坦なところは野菜畑に

なっている。小川に近づくると、花のついている若々しいススキが風に揺れている。七草では尾花と呼ばれる。

川の対岸は荒地になつていてクズが生い茂っている。花を期待しながら農道をゆっくり歩くと、見てほしいといわぬばかりに咲いているのが眼に留まつた。

クズの花弁の内側は赤紫色で外側は白みがかつている。大きさは小指の爪ぐらいで、蝶々のようなマメ科特有の形である。この花が房になつて、フジを逆さにしたようになり、付根の方ほどよく咲いている。

秋の七草は4つしか見なかつたが、一番好きなオミナエシと、一番美しいと思うクズの両方を見た。花を楽しみ、空の青さとそよ風に癒された。ゆっくりと2時間近く歩き、閉じこもりから抜け出した気持ちになれた。